

信者の内に働く聖霊 パート 3

1A 祈りを助けられる聖霊 ローマ8:26-27

1B 神の平和の計画 エレミヤ 29:11

2B 神の願いへ心を開く祈り ヨハネ 15:16

3B 一順する御心 ピリピ 2:13

4B 御心の分からない弱さ

1C 思いの異なる神 イザヤ 55:8

2C 言いようもない呻き 1サムエル 1:10-17

3C 霊による祈り 1コリント 14:14

2A 贖いの保証となられる方 エペソ1:13-14

1B 贖いのご計画 ローマ 8:18-25

2B 聖霊による証印 1コリント 6:19-20

3B 本気で贖う意志 2コリント 1:22

本文

私たちは、聖霊の働きについて、キリストを信じる者たちの内に働く聖霊の働きを見えています。みことばを教え、思い起こさせてくださる働き、そしてキリストの似姿へ変えてくださる働きを見ました。今回は、さらに二つのことを見たいと思います。一つは祈りを助けられる働き、次に神の贖いの保証となっておられる働きです。

1A 祈りを助けられる聖霊 ローマ8:26-27

一つ目、祈りを助けられる働きを見るのに、ローマ 8 章 26-27 節を見ましょう。「御霊も同じようにして、弱い私たちを助けてくださいます。私たちは、どのように祈ったらよいかわからないのですが、御霊ご自身が、言いようもない深いうめきによって、私たちのためにとりなしてください。人間の心を探り窮める方は、御霊の思いが何かをよく知っておられます。なぜなら、御霊は、神のみこころに従って、聖徒のためにとりなしをしてくださるからです。」

1B 神の平和の計画 エレミヤ 29:11

私たちの祈る時に覚えておかなければいけないのは、「神の御心を変えることではない」ということです。自分の願いや訴えを聞いていただいて、神の考えておられることを変えることではありません。イエス様が、このようにして祈りなさいと言われた祈りの中に、「みこころが天で行れるように、地でも行われますように。(マタイ 6:10)」というものがありません。地に御心が行われるようにすることが祈りであり、地上での私たちの意志が天で叶えられるのが祈りではありません。

私たちは、次の御言葉の約束があるのを知る時、神の御心を決して変えてはいけないと思う

のです。「わたしはあなたがたのために立てている計画をよく知っているからだ。…主の御告げ。…それはわざわざではなくて、平安を与える計画であり、あなたがたに将来と希望を与えるためのものだ。(エレミヤ書 29:11)」神のご計画は、災いではなく平安を与えるものです。将来と希望を与えるためのものです。私たちにとって最善を神は願っております。ですから、祈りによって神に御心を変えていただくとするのは、自分にとっての最善を引き下げてくださいとするのと同じ、愚かな行為です。

2B 神の願いへ心を開く祈り ヨハネ 15:16

では、なぜ祈るのか？何もしないで、神の御心が叶えられることをただ待っていればよいではないか？神がすべてをご自分の御心のままにするのなら、自分が祈っても意味がないではないか？と思われるかもしれません。いいえ、祈りの目的は神が御心を成し遂げるのに、私たちの心を広げる行為であります。神が私たちに最善を行われるために、私たちがその計画に心を開き、生活や人生を明け渡すことです。神は、私たちに自由意志を与えておられます。神は、私たちをロボットのように機械的に従うようにさせることはありません。あくまでも神を愛しているからという動機によって、選択によって神に従うことを願っておられます。私たちが御心を選び取ることができるよう、状況や圧迫や困難によって影響を与えることはなさいますが、最終的な決断は私たちにゆだねられています。

そこで愚かにも、私たちはその自由意志を使って御心に抵抗しようとしてしまいます。けれども神はいつも私たちに正しいもの、良いものを与えようとしておられます。「あなたがたの父なる神は、あなたがたが願う前に、あなたがたに必要なものを知っておられるからです。(マタイ 6:8)」ヨハネ 15 章 16 節に、興味深いイエス様の言葉があります。「あなたがたがわたしを選んだのではありません。わたしがあなたがたを選び、あなたがたを任命したのです。それは、あなたがたが行って実を結び、そのあなたがたの実が残るためであり、また、あなたがたがわたしの名によって父に求めるものは何でも、父があなたがたにお与えになるためです。」この、父があなたがたにお与えになる、という言葉は、英語ですと、"He may give it to you."となっています。そこにある意味合いは、「お与えになるように許される。」というものです。私たちが自由意志によって、神の与えようとしておられるものを受け入れるのであれば、神はそれを与えられるということです。

3B 一順する御心 ピリピ 2:13

祈りは、ちょうど水の循環のように、神から始まり、神に至り着く循環によって成り立っています。祈りは、神の御心、神の目的、神の願いから始まります。そして、神はそれを願いとして私たちの心に置かれます。「ピリピ 2:13 神は、みこころのままに、あなたがたのうちに働いて志を立てさせ、事を行なわせてくださるのです。」御心のままに、志を私たちに立てさせてくださいます。そして、エレミヤ書 31 章 33 節では、「わたしはわたしの律法を彼らの中に置き、彼らの心にこれを書きしるす。わたしは彼らの神となり、彼らはわたしの民となる。」とあります。神の律法、つまり神の願われていることが、私たちの心の中に書き記されるのです。そして私たちは、詩篇の学びで学びまし

た。「主をおのれの喜びとせよ。主はあなたの心の願いをかなえてくださる。(37:4)」神がご自分の願いを私たちに与えてくださいます。

それを私たちは神に申し上げるのです。私たちの心を動かし、それを祈りによって思いを神にしていたいただき、その思いをかなえられることによって神は事を行ってくださいます。ですから、水蒸気が空中で雲となり、雨を降らせ、それが山に降り、川となって海に流れ、海から水蒸気として外に上っていき、それで再び雲を作るというように、祈りが神の御心から始まり、私たちの心と志に神の願いが置かれ、それを祈りによって私たちは言い表し、そして神にその祈りが聞かれるということです。ですから、神はご自分と心をつにしている人を探しておられます。「歴代誌第二 16:9 主はその御目をもって、あまねく全地を見渡し、その心がご自分と全く一つになっている人々に御力をあらわしてくださるのです。」

4B 御心の分からない弱さ

そこで大事なものは、神の御心を知ることです。そして神の心と自分の心が調和することです。私たちが主に自分自身を捧げることによって、御心を知って、自分の思いが一新されることを願います。「この世と調子を合わせてはいけません。いや、むしろ、神のみこころは何か、すなわち、何が良いことで、神に受け入れられ、完全であるのかをわきまえ知るために、心の一新によって自分を変えなさい。(ローマ 12:2)」そして、御心に沿った祈りは必ずかなえられるという確信が与えられます。「何事でも神のみこころにかなう願いをするなら、神はその願いを聞いてくださるということ、これこそ神に対する私たちの確信です。私たちの願う事を神が聞いてくださると知れば、神に願ったその事は、すでになえられたと知るので。(1ヨハネ 5:14-15)」

1C 思いの異なる神 イザヤ 55:8

けれども、私たちに問題があります。ある特定の状況において神の御心を知ることができていないという弱さがあります。それが初めに開いたローマ 8 章の言葉です。「御霊も同じようにして、弱い私たちを助けてくださいます。私たちは、どのように祈ったらよいかわからないのですが、御霊ご自身が、言いようもない深いうめきによって、私たちのためにとりなしてくださいます。」どう祈ったらよいか分からない、御心がどこにあるかわからないという弱さがあります。誰かのために祈る時に、それが御心にならなかったものなのかどうか分からない時があります。その祈りがかなえられることが、はたしてその人によって良いことなのか、悩むことがしばしばあります。それよりも、むしろその願いが叶えられないほうが、その人のためになるのではないかと思うことがあります。

私たちは、人の目には正しいもののように見えても、その先は闇である道がたくさんあります。主はイザヤを通して、こう言われました。「わたしの思いは、あなたがたの思いと異なり、わたしの道は、あなたがたの道と異なるからだ。…主の御告げ。…天が地よりも高いように、わたしの道は、あなたがたの道よりも高く、わたしの思いは、あなたがたの思いよりも高い。(イザヤ 55:8-9)」その時には、神への祈りが聞かれなかったことを後で、聞かれなくてよかったと思う祈りが多くありま

す。主は、思いをはるかに超えたところで祈りを叶えられますが、その時の具体的な祈りには答えを与えられないことがあるのです。もしそれでも「私はこれをやります。」と、ごり押ししたら、その後で大きな傷を残してしまう決断をしてしまうこともあります。

2C 言いようもない呻き 1サムエル 1:10-17

この部分において、御霊が助けてくださいます。どのようにかと言いますと、「御霊ご自身が、言いようもない深いうめきによって、私たちのためにとりなしてください。」とあります。この「言いようもない呻き」について、よく知ることのできる聖書の話は、サムエルの母ハンナです。ハンナの祈りによって、その願いを神が聞かれて、それでサムエルが生まれました。けれども、短期的には決して好ましい状況と言えない中で捧げられた祈りでした。私たちは、祈りや信仰生活を理想化しすぎる傾向がありますが、ハンナが取り囲まれていた状況から、神の御心の深さと広さを知りたいと思います。

それは、ハンナはエルカナという人の妻でした。けれども、エルカナにはもう一人妻がいました。ペニンナと言います。ここから、もう好ましい状況ではないことが想像できますね。神は、男を造られそこから女を造られ、一夫一妻を御心としておりました。けれども、旧約時代の多くの男性が二人以上の妻を持ち、それで問題が起きました。同じく男は愛することはできないということです。彼はハンナをより多く愛しました。ところが、主はハンナの胎を閉じられたとあります。ペニンナが子を多く生むのですが、そのことを梃子にしてハンナをいらだたせ、いじめるのです。

そして主への祭りの時に、シロに上っていきいけにえを捧げるのですが、ハンナはあまりにも悲しくて食事もできませんでした。エルカナは、「なぜ塞いでいるのか。あなたは、息子十人以上にまさるものだ。」と言いました。ここで男がいかにも、女の心やその辛さを分かっていないかをよく表しています。その悲しみは理屈で解決するような類いではないからです。

けれども、神はそうした歪んだ状態を用いられます。ハンナは、このような辛いところに置かれなかったら、次の祈りは捧げることはなかったでしょう。「ハンナの心は痛んでいた。彼女は主に祈って、激しく泣いた。そして誓願を立てて言った。「万軍の主よ。もし、あなたが、はしための悩みを顧みて、私を心に留め、このはしために忘れず、このはしために男の子を授けてくださいますなら、私はその子の一生を主にやさげします。そして、その子の頭に、かみそりを当てません。」(1サムエル 1:10-11)」ナジル人として一生やさげる祈りをしたのです。一人の男の子を自分の手元に置いておきたいのが母心です。しかし、彼女はこの切羽詰まった状況の中で、それでも授けてくださるなら男の子を捧げますという祈りを捧げたのです。

その時に、神が何をされようとしたかと言いますと、士師の時代、自分たちが自分で正しいことをしている状態でした、霊的に混乱状態です。主をほめたたえますと言いながら、偶像を造っていた時です。そしてゾドムと同じようなことをベニヤミン人が行いました。そこで必要なのは、イスラエル

の民が神に立ち返り、主に従わせるような霊的指導者です。ところが祭司エリの息子二人は、よこしまな者たちでした。それで、主はハンナの胎を閉じられたのです。彼女から生まれる男の子を、主への一生のナジル人にするようにしようとされました。それで、もう一人の妻から陰湿ないじめを受けるようにされたのです。ハンナにはそう祈らない選択もありました。けれども、男の子を捧げる祈りを捧げました。

そして、このハンナの祈りを聞いていたのが祭司エリです。その時、彼はハンナが酒に酔っているのではないかと思いました。「ハンナが主の前で長く祈っている間、エリはその口もとを見守っていた。ハンナは心のうちで祈っていたので、くちびるが動くだけで、その声は聞こえなかった。それでエリは彼女が酔っているのではないかと思った。エリは彼女に言った。「いつまで酔っているのか。酔いをさましなさい。」ハンナは答えて言った。「いいえ、祭司さま。私は心に悩みのある女でございます。ぶどう酒も、お酒も飲んでおりません。私は主の前に、私の心を注ぎ出していたのです。(1:12-15)」言葉で明瞭に出てこない祈りであったのです。ですから、酔っていたのではないかとエリは思いました。これが、「言しようもない深い呻き」です。御霊が助けてくださる祈りです。

同じような祈りを、ヒゼキヤ王も行なっています。彼は、死の宣告を受けましたが、その時にこう祈りました。「つばめや、つるのように、私は泣き、鳩のようにうめきました。(イザヤ 38:14)」燕や鶴、また鳩のように泣く祈り、言葉になっていない深い呻きです。

他の聖書箇所でも、聖霊によって祈りなさいという命令があります。「しかし、愛する人々よ。あなたがたは、自分の持っている最も聖い信仰の上に自分自身を築き上げ、聖霊によって祈り、神の愛のうちに自分自身を保ち、永遠のいのちに至らせる、私たちの主イエス・キリストのあわれみを待ち望みなさい。(ユダ 20-21)」そして、霊の戦いの祈りで有名なエペソ 6 章にはこうあります。「すべての祈りと願いを用いて、どんなときにも御霊によって祈りなさい。そのためには絶えず目をさましていて、すべての聖徒のために、忍耐の限りを尽くし、また祈りなさい。(18 節)」

3C 霊による祈り 1コリント 14:14

しかし、ローマ 8 章にあるように、御霊がそのような祈りを助けてくださり、御心に沿って祈ってくださいます。そのようにして神の御心の通りに私たちを導いてくださるのです。もう一つ、言葉にならない祈りとして、使徒パウロが異言の祈りを紹介しています。「もし私が異言で祈るなら、私の霊は祈るが、私の知性は実を結ばないのです。ではどうすればよいのでしょうか。私は霊において祈り、また知性においても祈りましょう。霊において賛美し、また知性においても賛美しましょう。(1コリント 14:14-15)」異言の賜物については、後の学びで詳しく学びます。けれども、ここでは知性、すなわち日本語やその他の自分に理解できる言語ではない、他の言語であることを伝えておきます。自分が祈るという意志は持っていますが、舌の動きは自分の意識で動かしているのではない、そのような祈りです。この祈りは知性ではなく、霊によって祈るのだとパウロは言っています。

この祈りは、教会において、多くの人が集まるような場、特に未信者の人も祈るような場では解き明かしが限りに行いません。それは、知性の言葉を話して理解が与えられ、教会全体の益になるようにしないといけなからです。けれども、霊で祈ることによって大きな益があります。自分の祈りが豊かにされます。一つに、自分では理解できなくても、神の御心に沿った祈りを捧げているという確信です。信仰によって、御心に沿った祈りを捧げていることを知ります。したがって第二に、自己中心的な祈りを避けることができます。自分の欲が満たされるための祈りではなく、神の願いがかねえられるところの祈りを捧げられています。第三に、霊においては感じていても、言葉で言い表すことのできない程の喜びや感謝、賛美を異言によって神に捧げることができます。どうか、異言にしても、そうでないにしても、御霊の助けを受けて、言いようもない深い呻きによる祈りを神が導いてくださるように祈ります。

2A 贖いの保証となられる方 エペソ1:13-14

1B 贖いのご計画 ローマ 8:18-25

そして、改めてローマ 8 章 26-27 節を見たいと思います。いや、その前後関係を眺めてみたいと思います。御霊が神の御心のままに祈りを導いてくださる、その背景に何があるのでしょうか？ 15 節から、使徒パウロは御霊によって私たちが神の子どもになったことを証してくださることを話しています。そして、キリストにあって共同の相続人になっていることも話しています。

けれども 18 節から、その相続を得るまで私たちは忍耐して待たなければいけないことを話しています。後に来る栄光、被造物がすべて解放されて、エデンの園のように神の願われているとおりに回復することが書かれています。しかし、今は罪の呪いの下にあるので、うめいて待っていることが書かれています。そして、神の子供とされた私たちも、御霊の初穂を受けたのですが、この体はまだ贖われていないので、呻いていることが書かれています。私たちの霊は贖われました。そしてこの体も、そして世界全体も贖われるのですが、それは前者の場合は、教会の携挙の時に、すなわちイエス様が信じている者たちのために空中にまで戻ってきてくださる時に実現し、世界の贖いは、キリストが教会と共に地上に戻ってこられる再臨の時に実現します。

そして、先ほどの御霊によって、どうやって祈ればよいか分からない時に言いようもない深い呻きによって、御霊が執り成してくださるという真理につながります。神のご計画に従って、御霊が祈ってくださるのです。そして次に、有名な、神が、召された者たちのために、その後計画に従って、すべてのことを益として働かせてくださる真理をパウロは語っています。

2B 聖霊による証印 1 コリント 6:19-20

ですから、聖霊は私たちが、贖いが完成するまで傍にいて助けてくださる、私たちの肉の弱さを助け、支えてくださる方であることが分かるのです。そこでエペソ 1 章 13-14 節を読みましょう。「またあなたがたも、キリストにあって、真理のことば、すなわちあなたがたの救いの福音を聞き、またそれを信じたことによって、約束の聖霊をもって証印を押されました。聖霊は私たちが御国を受け

継ぐことの保証であります。これは神の民の贖いのためであり、神の栄光がほめたたえられるためです。」聖霊の証印が押された、それから御国を受け継ぐ保証が与えられたという二つの祝福が書かれています。

これはエペソに住むキリスト者に書かれた手紙ですが、エペソというのは今のトルコ、小アジアの西、地中海に面する町であり、貿易の中継都市でした。ローマが当時の世界の中心都市でした。数多くの品目が世界中からローマに集まってきましたが、東洋から運ばれてくる時に、エペソが貿易の中継地となりました。そこで商人が商品を買つけます。そして、自分の買ったものをローマで売りますが、地中海でポテオリという、イタリア半島にある町行きの船に載せます。その時に、誰の荷物であるかをはっきりさせるために、証印を押します。当時の判子は、指輪にある型です。荷物の上に蠟をたらし、その上にその印を押し付けます。そして固まったものが、証印となります。今で言うならば、カートン・ナンバーです。コンピューター化されているので、全世界からある荷物がどこにあるか特定できるようになっています。

そして、ポテオリに着いた荷物は、主人の僕が捜します。見つけると、「これが主人の荷物です。」とその所有権を主張するのです。

エペソ人であれば、このことはよく知っている知識ですが、パウロは、「あなたがたは、神の所有の民となりました。その証印が聖霊なのです。」と教えているのです。聖霊は、自分が神によって買い取られた者であることを証明しています。罪の奴隷であった自分が、キリストの流された血によって買い戻された、贖われた者であることを教えています。「あなたがたのからだは、あなたがたのうちに住まれる、神から受けた聖霊の宮であり、あなたがたは、もはや自分自身のものではないことを、知らないのですか。あなたがたは、代価を払って買い取られたのです。ですから自分のからだをもって、神の栄光を現わしなさい。(1コリント 6:19-20)」

そして神の贖いは将来に完成します。からだの贖いが、主が戻られた時に与えられます。そして教会が主と共に地上に戻ります。そして主と共に、共同の相続者となり、共に統べ治めるのです。それはあたかも、エペソを発って、船の中で主人の証印を押された荷物のようなものです。海を航行しているのですが、それは贖いの日待つ私たちのようであります。主のものとされていますが、その所有権がまだ執行されていません。けれども、ポテオリで「これがわたしのものだ。」と主張されるように、私たちも「あなたは、わたしのものだ。」と主イエスが所有権を行使してくださるのです。

3B 本気で贖う意志 2コリント 1:22

そして、「聖霊は私たちが御国を受け継ぐことの保証であります。」とパウロは言っています。ここの「保証」という言葉は、「手付金」あるいは「頭金」と訳すことのできる言葉です。これも商業用語ですが、ある商品を購入する気が本当にある、それを買うのは本気だということを示すものです。大きな買い物をする時に、私たちは「頭金」や「手付金」の制度があります。何かこれを買いたいと

い」と、例えば自家用車を購入する時に言ったとします。けれども、自動車を売っている人はその買い手のために、支払が済むまで他の人には売らず、その車を取っておかなければいけません。けれども、その買い手は他の所でもっと安い、気に入った車が見つかりました。そうしたら、せっかく他の客にその自動車を販売する機会があったのに、その機会が失われてしまいます。それで、自動車の購入する全額の一部を、頭金、あるいは手付金として受け取るのです。もし、その購入を断念するなら、頭金はいただきますよ、ということです。

したがって、神は聖霊を贖いのための保証と言われています。神が確かに、私たちが贖ってくださることの意図、それが本気であることを示すために聖霊を下さいました。聖霊の実は、愛、喜び、平安、寛容などです。御霊の実に満たされる時、すなわち神の愛、平安、喜び、そして忍耐や自制などの実が結ばれて喜んでいる時に、神は言われるのです。「それは、頭金だよ。」と。つまり、御霊によって喜んでいる私たちは、後にはこれよりもはるかにすぐれた栄光の至福が待っているのだ、ということです。「私たちがあなたがたといっしょにキリストのうちに堅く保ち、私たちに油を注がれた方は神です。神はまた、確認の印を私たちに押し、保証として、御霊を私たちの心に与えてくださいました。(2コリント 1:21-22)」

これで分かったでしょうか、神は聖霊によって私たちを運んでくださっています。ご自分のものであることを示し、後に必ず贖われることを保証してくださっています。そしてその間、私たちは神のご計画の中で生かされます。それは良い計画で、将来と希望を与えるためのものです。しかし、私たちは肉の弱さで、御心が分からない時があります。ですから言葉にならないうめきによって、御霊は私たちの祈りを助けてくださいます。そしてその執り成しは、御心に沿ったもので、私たちの中で神の御心が成し遂げられていくのです。